地域おこし協力隊
リレーレポート

# 現役大学生が地域おこし協力隊になって

松野町　地域おこし協力隊　大塚　陸人

## なぜ地域おこし協力隊になったのか

平成28年4月から平成30年3月末まで、私は日本大学を休学し、松野町地域おこし協力隊として活動していました。4月からは復学のため、出身地である東京に戻ります。

「何でわざわざ休学して来たんや？」2年間、たくさんの方にこの質問を投げかけられました。私は、幼い頃から東京で育ってきたのですが、何故だか高校生のころから田舎暮らしに興味がありました。そして、就職活動を直前に迎えた2年前の大学3年生のとき。今後の人生について考えるなかで、どうしてもその思いが抑えきれなくなり、地域おこし協力隊になることを決心しました。休学を選択したのは正直、移住が少し怖かったから。もし地域に馴染めなかったらどうしよう、仕事はどうなるのだろう。2年前は不安なことだらけで、東京に逃げ場を作っておきたかったのです。自分でも、弱気な選択で、甘い考えだというのは痛いほど分かっています。

田植えの様子

しかし、松野町に移住してみて、2年前に思っていたことは杞憂に終わりました。仕事も、地域の方々との付き合いも、お祭りなどの行事も全てが新鮮で刺激的で本当に充実した2年間でした。今では、松野町にすっかり魅了され、大学を卒業したらまた松野町に帰ってきたいと考えています。

## 2年間の活動

2年間の活動のメインは農業でした。松野町の特産品である桃の栽培振興、（株）松野町農林公社のアグリレスキュー事業（高齢者などへの農作業支援）を通じて、農業スキルの取得を目指し、桃、柚子、梅、お茶、米、野菜など様々な農作業を経験しました。農業の面白さ、難しさ、奥深さを、身をもって学ぶことができ、松野町に帰ってきても農業は続けていきたいなと思っています。

雪景色の桃畑

また、農業とは別の活動で、松野町と母校の大学生との連携プロジェクトを進めてきました。松野町全体を勉強のフィールドとし、東京の大学生に農業や観光、移住など興味のある分野について学んでもらう。そして、東京の若者の視点で気になったこと、感じたこ

と、どんな些細な意見でも町にどんどん提案してもらいたいと考えています。社会経験のない大学生の提案なので、町民の方々からしたら受け入れがたい提案がほとんどだと思います。けれども、大学生は若者ならではの柔軟な発想で、誰もが考えもつかなかったような核心を突いた提案をする可能性が大いにあると私は思っています。大学生の意見が松野町の地域づくりの現場に反映されることになったら、大学生は東京に戻ってもきっと松野町のことをずっと気にかけてくれる存在になるでしょう。愛媛と東京、距離は遠くても松野町のために東京でできることはたくさんあります。そんな都心在住の松野町ファンをたくさん増やしたいのです。大学生は、学校では学べないリアルな地域づくりの現場を経験できる。松野町はなかなか聞けない若者の斬新な意見を聞け、松野町ファンを増やすことができる。そんな連携プロジェクトが今後も継続されていくよう、4月からも東京で携わっていきたいと思います。

松野町長と大学生との協議

## 大学生が地域のためにできること

今回は「大学生による地域活性化」という特集テーマですが、私は、地域活性化を難しく捉えすぎないことが大切かなと思います。私は、地域活性化のために何かしたいと思って松野町にやって来ましたが、そこで直面したのは自分の無力さでした。当然の話ですが、周りの大人に比べたら知識も経験もありません。けれども、町のことを思って知恵を振り絞ることはできます。もっとこうしたら住みやすい町になるのに、働きやすい環境になるのに。結婚して子供ができたときにこんな制度があればいいのに・・・。

若者が思ったこと、考えたことはそれを実現できる人に伝えないと意味がありません。そして大人には実現が難しくても、その意見をしっかりと聞いてほしい。そういったコミュニケーションだけでも、それが地域活性化につながるのではないのでしょうか。ぜひ、これを読んでくださっているみなさんには、自分の子供、部下、近所の子の意見に耳を傾けてほしいです。

近所のお気に入りの風景

## さいごに

現役大学生が休学して地域おこし協力隊になるのは全国でも珍しいケースです。それでも快く受け入れてくれた松野町、いつも手厚い活動のサポートをしてくださった町民の方々には感謝の気持ちしかありません。2年間の活動任期中に、やり切れなかったこと、できなかったこと、やりたかったことは、数え切れないほどあります。松野町に帰ってきてそれを成し遂げるためには、このままの自分では明らかに力不足です。東京でパワーアップして、また松野町に帰ってきます。

滑床渓谷でのキャニオニング